

## 5周年記念・市民芸術祭の感想(1)

### 第5回芸術祭を終えて

今回運営面で特徴的だったことは、各部門が今までよりも自主独立した形で準備を進めた点です。チラシやパンフレットを全体で共通なもの、各部門ごとの工夫を盛り込んだものを用意したこともこれまでの反省を活かした初めての試みでした。また、一般公募による「ヤングフェスティバル」に代表されるように、文団連の外の力とのコラボレーションに積極的に取り組みました。大成功であったと思いますが、各部の独自性を高め、新しい取り組みにチャレンジした分、全体の運営面でまとまり感に欠けていた面がありました。

2日間で延べ2500名のお客様に来場して頂けたのですが、各部門が自分達自身で集客の努力をしたことも新たな動きといえます。しかしアンケートに見られる「これだけのいい舞台をもっと多くの人に観てもらえるように宣伝すべき」とのご意見に応えるには、大ホール公演における宣伝面の抜本的対策や公演日程などの改善が必要と感じています。

芸術祭実行委員会・事務局長 小川 忠史

### 「喜・怒・哀・楽そして未来へ」

舞台部門、二日目大ホール

2月27日の舞台では、7団体140名程の会員が参加いたしました。舞台構成、演出、監督とプロの手に委ねましたが、舞台スタッフとしてまた会場内スタッフとして、多くの方々が参加して下さいました。本当にお疲れ様でした。

舞台は和太鼓のリズミカルな音から始まり、日舞、吟と詩舞、新舞踊と帯結び(うるおいきもの)、「少年少女合唱団」と「さやま川の街合唱団」そしてそれらのブリッジとして三曲連盟の箏と尺八、篠笛、琵琶。それぞれが奏でる何と素晴らしい音色……。

それぞれの音が、そして独自の表現が、オープニングからエンディングまでばらばらにならず一つの流れとなり、また今までに起用のなかった埼玉県のマスコット「コバトン」までが文団連のために活躍し、会場の皆様にも「これぞ5周年記念事業」と伝わった事と思います。

グランドフィナーレで、さねとうあきら作詞、砂田弘行作曲、「新・狭山音頭」は、会場内を巻き込んだ大合唱となり、新舞踊連盟が場内を練り踊りました。公演的には大成功だったとおもいます。ただ例年通り集客面に問題があります。多くの参加団体があるのにも関わらずどうしてなのかな?もっと文団連の知名度を上げるにはどの様にしたら良いのでしょうか……。



「喜・怒・哀・楽そして未来へ」統括 藤寿 紫峰